

# ちょっと ブレイク しませんか?



## 第 31 回 「エデンの東」 【1955年 米国】

イソップ寓話に「ゼウスと善の甕(かめ)」と題する小話がある。

ゼウスはある限りの善を集めて甕に入れ、蓋をして、ある男に預けた。男は中身が知りたくて我慢がならず、蓋をずらしたため、中のものは神々の館へと逃げ帰り、地上を遠く離れたところで飛びまわることになった。ただひとつ希望だけが留まったのは、辛うじて蓋が閉められ、これを逃さなかったからだ。……もう一つの寓話は「兄弟喧嘩する農夫の息子」。農夫の息子たちが喧嘩ばかりしていた。いくら言っても聞かせても、言葉ではとうてい改心してくれないので、行いで教えこむしかないという悟り、棒の束を持ってくるように命じた。息子たちが言いつけどおり持ってくると、農夫はまず、棒を束のまま渡して、折ってみろと言った。いくら力を入れても折れないので、今度は束をほどき、棒を一本ずつにして渡した。息子たちが易々と折っていくのを見て、農夫が言うには「よいか、お前たちも心一つにしている限り、敵も手が出せまい。しかし、内輪もめをしていると、容易に敵の手に落ちるぞ」

いまはなきジェームス・ディーン主演の「エデンの東」映画史に残る名作だ。米国の大規模農家の父と息子たちの葛藤を描いている。次男キラルは娼館酒場の経営者ケートを尾行していた。実母かもしれないと疑ったからである。キラルはケートに追い返される。ある日、キラルは「父から愛されていないのではないかと悩み始める。やがて父アダムが冷凍保存したレタスを東海岸に運び大儲けすることを狙って、貨物列車で東部の市場へ輸送したが雪崩で通行不能となり氷が溶けて野菜が腐り大損害。キラルは損失額を取り戻すべく、戦争景気で豆が高騰するという儲け話に飛びつく。第一次世界大戦が始まり、豆取引でキラルが得た利益が父アダムの損失額を補填できる金額になり父の誕生日にそれを渡すが、父は金を突き返す。キラルは大声で泣き「父さんが憎い」と叫んで出て行く。兄アロンは恋人のアブラが嘆くキラルを慰めているのを目撃し嫉妬で激昂。キラルは父への憎しみが何時しか兄への憎しみに変わり、母であるケートの酒場にアロンを連れていき初めて彼に母と対面させる。出兵する若者を乗せた列車の窓から徴兵されたアロンは頭で窓ガラスを破る。父アダムはショックで脳出血で倒れ寝たきり状態になってしまう。キラルは良心の呵責に苦しむ。皆が見舞いに来る中で保安官のサムがキラルに「アダムとイヴの子カインは、嫉妬の余りその弟アベルを殺す。やがてカインは立ち去りてエデンの東ノドの地に住みにけり」と旧約聖書の一節を語り、家出を勧める。出立を決意したキラルは病床にあるアダムに許しを乞うがアダムは何の反応も示さない。アブラは絶望して部屋に入りたがらないキラルに父のベッドで再び許しを請うように促す。何かにつけて煩い付き添い看護婦に「出てけ!!」とキラルが叫んだ直後「あの看護婦を首にして、お前が付き添ってくれ」と父は小声で告げる。そしてキラルはずっと父のベッドに佇むのであった。キラルが父と心を通じ合わせた瞬間だった。

返しのない愛は辛い。憎しみが愛の裏返しの場合もある。善悪で二分できないのが人と人の間だ。他人の始まりと云われる兄弟も骨肉の争いはみっともない。善人の父に同一化する長男、悪人の母に親和性を感じる次男はカインとアベルの代理人とも云える。毛利元就の格言にも通じるイソップ寓話は現代人にも示唆に富む。ところでレタスの冷凍保存は百年経って実現したのだろうか。



かゆ かわ ゆう へい  
**粥川 裕平**  
(精神科医・映画評論家)

名古屋工業大学 名誉教授  
かゆかわクリニック院長